「今鏡」の「今贄殿参り侍なむ」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川岸, 敬子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5198

明治大学教養論集　通巻三七七号（二〇〇四・一）五三―六七頁

「今鏡」の「今贄殿参り侍なむ」について

川岸敬子

一　はじめに

「今鏡」ふぢなみの上　第四　ふしみの雪の朝　に次のような一節がある。

大殿の伏見へおはしましたりけるも、すゞろなる所へはおはしますまじきに、雪の降りたりけるつとめて、「俊綱がいたくふけらかすに、にはかに行きて見む」とて、播磨守師信といふ人ばかり御供にて、にはかにわたらせ給たりければ、思ひ寄らぬ事にて、修理の大夫騒ぎ出でゝ、雪御覧じ、御物語などせさせ給程に、師信、「かくわたらせ給ひたるに、とくしかるべきあるじなどつかうまつれ」など催しければ、俊綱、「今贄殿参り侍なむ」と申ければ、「人にも知られでわたらせ給たれば、贄殿参る事あるまじ。日もやう〳〵たけて、いかでか御まうけなくてあらむ」といひければ、

（九九～一〇〇頁）[注1]

『今鏡全釈』[注2]においては、「贄殿参り侍りなむ」について、「贄殿は貴人の家などで、魚鳥を納めておいたり、調理する所。『贄殿へ参り侍りなむ』の意か。あるいは、贄殿はここでは調理人の意と見るべきか。」（上三九八頁）とし、その後の部分も含めて、

「今贄殿へ参りましょう」と申したので、「人にも知られないように（お忍びで）お渡りになったのだから、贄殿へ参る必要はない。（略）」

と口語訳（上三九七頁）している。

ここでの「贄殿」は場所なのだろうか。人なのだろうか。それについて考察することにした。

二　諸本の異同

「今鏡」の諸本については、『日本古典文学大事典』[注3]の「今鏡」の項（海野泰男執筆）に、

伝本には、鎌倉時代中頃の書写かといわれる現存最古の完本畠山本、応永の頃（一四一九～一四二八）の写本で流布本系の祖となった蓬左文庫本、これらとはまた別系統の異文を持つ前田本（巻四・五のみ）等がある。[注4]

とある。

そこでまず畠山本[注5]を見ると、「いまにゑ殿まいり侍なんと申けれは人にもしられてわたらせ給たれはにゑとのまいる事あるまし」とある。

次に前田本[注6]を見ると、「いまにゑとのまいり侍なんと申けれは人にもしられてわたらせ給たれはにゑ殿まいる事あるまし」とあり、表記の違いはあるが、同文である。

さらに流布本系の慶安三年版「続世継」[注7]を見ると、「いま。にべとのまいり侍なんと申けれは。人にもしられて。わたらせ給たれはにへ殿まいることあるまし。」とある。「にべとの」と、ここだけ濁点のようなものが見られるが、同文と見てよいであろう。

以上、三本を見る限りでは、この箇所に語句の異同はない。

三　注釈書類

では、『今鏡全釈』以外の注釈書類では、どのように説明しているのだろうか。

『今鏡新註』[注8]は、「贄殿」の頭注で「もとは食料設備の場所をいふなれど、転じては贄殿に伺候する、庖丁の者をも、しか云へり、こゝは食事の設けに、殿より料理人来らむとの意なり。」（一四五～一四六頁）としている。

日本古典全書『今鏡』[注9]も、「贄殿」の頭注で「貴人の家で物を調理する場所だが、こゝでは調理人。」（一六五頁）としている。

講談社学術文庫『今鏡（中）』[注10]も、「贄殿」の語釈で「貴人の家などで、魚鳥などを調理する所。ここは、調理をする人の意。」（七〇頁）としている。

以上の三書はいずれも「贄殿」を料理人・調理人としている。場所の意味にとって訳しているのは、筆者が見た限りでは、『今鏡全釈』のみである。

四　「贄殿」

次に、「贄殿」に調理人の意味を認めてよいかどうかを検討する。

1　辞典類

まず辞典類を見てみよう。用例はとりあえず省略する。

『古語大辞典』[注11]の「にへどの」の項は、

①宮中で、大嘗祭（だいじょうさい）に際して造られる悠紀（ゆき）・主基（すき）の殿舎の一つで、神に供える贄を納めておく所。

②天皇に奉る魚や鳥を貯蔵または調理するための殿舎。大内裏では、諸国から奉献された贄を納めておく殿舎で、内膳司（ないぜんし）の中にあった。

③貴族の家で、魚や鳥などの食物を納めておいた所。または、食物を調理した所。また、その調理人。

となっている。③の最後に調理人とあるのが注目される。

『角川古語大辞典』[注12]の「にへどの」の項は、

神や天皇に奉られた贄（にへ）を収めた建物。宮中では内膳司（ないぜんし）にあった。また、高級貴族の邸内にもこの名の殿舎があり、食料品の保管や調理の場に用いられた。

となっている。

『日本国語大辞典』第二版[注13]の「にえどの」の項は、

①大嘗祭（だいじょうさい）の時、悠紀（ゆき）・主基（すき）の内院の中にあって、神供などを納めておく殿舎。

②内膳司にあって、諸国から献上された贄を納めておく所。

③貴人の家などで、魚や鳥などの食料を入れておく所。また、魚鳥などを調理する所。

となっており、子見出し「にえどのの別当（べっとう）」がある。

右の三種の辞典のうち、調理人の意味を載せているのは『古語大辞典』のみであり、その用例として挙げていると思われるのは、

「人にも知られで渡らせ給ひたれば、――参る事あるまじ」〈今鏡・四・伏見の雪の朝〉

だけである。本稿の冒頭に掲げた「今鏡」の二例[注14]によって、調理人の意味を載せたのかもしれない。

2　索引類

「贄殿」の実際の用例を探すため、「今鏡」の成立に比較的近い時期に成立した一五作品の総索引[注15]を利用した。用例が見つかったのは次の三作品であり、「贄殿」は一三例である。

「今昔物語集」（日本古典文学大系）巻二八　三〇話

茂経、宇治殿ノ盛ニ御マシケル時ニ参テ、贄殿ニ居タル程ニ、淡路ノ守源ノ頼親ノ朝臣ノ許ヨリ鯛ノ荒巻ヲ多ク奉タリケルヲ、贄殿ニ多取置ケルニ、贄殿ノ預□ノ義澄ト云フ者ニ、茂経其ノ荒巻ヲ三巻乞取テ、（略）然レバ、茂経、馬引カヘタル童ヲ呼ビ取テ、「其ノ馬ヲバ御門ニ繋テ、只今走テ殿ノ贄殿ニ行テ、贄殿ノ預ノ主ニ（略）ト云

テ、取テ来」ト私語キテ、（略）此テ、茂経ハ出走テ馬ニ乗、馳散シテ殿ニ参テ、贄殿預リ義澄ニ会テ云ク、（略）「（略）此ノ殿ノ若キ侍ノ主達ノ、勇ミ寵タル数、贄殿ニ御シテ、間木ニ被捧タル荒巻ヲ見テ、（略）」

右の七例はいずれも場所の意味である。第二例は、『日本国語大辞典』第二版「にえどの」③の用例の一つである。

「宇治拾遺物語」（日本古典文学大系）巻二ノ五

この用経、大殿に参りて、贄殿にゐたる程に、淡路の守頼親が、鯛のあら巻を多くたてまつりたりけるを、贄殿にもて参りたり。贄殿のあづかり、よしずみに、二巻用経こひとりて、（略）用経、馬ひかへたる童をよびとりて、「（略）たゞいま走り、大殿に贄殿のあづかりの主に、（略）」とてやりつ。（略）用経は、馬に乗て、はせちらして、殿に参りて、贄殿のあづかり、よしずみにあひて、

右五例もいずれも場所の意味である。第二例は、『古語大辞典』「にへどの」③の用例の一つである。

「古今著聞集」（日本古典文学大系）巻一六　五一九話

入道殿おほきにいからせ給て、御勘発のあまりに、贄殿の別当なりける侍をめして、麦飯に鰯あはせにて、ただいま調進すべき由仰られければ、

右一例も場所の意味である。『古語大辞典』「にへどの」③の用例の一つ、『日本国語大辞典』「にえどのの別当」の用例の一つはこれである。

以上、「にへどの」の用例を総索引を用いて調べた限りでは、調理人の意味の用例はなかった。

3 「釜殿」

「贄殿」のように場所を表す「〇〇殿」が、そこで働く人をも表す例があるのだろうか。そのような観点で調べたところ、「釜殿」が浮かび上がった。この語は、『古語大辞典』「かなへどの」の項、『角川古語大辞典』「かなへどの」の項、『日本国語大辞典』第二版「かなえどの」の項、いずれもが場所の意味と、そこで働く人の意味を認めている。『日本国語大辞典』第二版「かなえどの」の項のみを挙げておこう。用例は省略する。

①平安以後、宮中、社寺や貴人の邸内にあった建物の一つで、湯や御膳を調進するための釜を置いたところ。大嘗宮や宮中の内膳司、主殿寮にあった。釜屋（かまや）。かないど。かないどの。かまどの。

②①に勤仕する職員。かないど。かないどの。かまどの。

このような語が存在することにより、「今鏡」において、「贄殿」が調理人の意味に拡大して用いられた（仮に調理人の意味の「贄殿」が「今鏡」の二例だけだとして）という可能性も考えられる。

五　助詞の脱落

ではもう一つの立場、『今鏡全釈』に見られる「『贄殿へ参り侍りなむ』の意か」とする立場について検討しよう。この場合、考察すべき点が二つある。一つは、助詞「へ」または「に」の脱落が認められるかということ、もう一つは、「今鏡」の「参る」に菊地康人の言う「謙譲語B」[注16]の用法を認めてよいかということである。

「今鏡」において、助詞「に」「へ」が脱落したと思われる箇所はない。

東宮にはじめて参らせ給ける頃、（一三頁五行）[注17]

天王寺へ参り給けるに、（二四九頁一行）

しかし、「今物語」には助詞「に」が脱落したと思われる箇所が存在する。「今鏡」の作者については、藤原為経（寂超）とする説がほぼ定説となっているが[注18]、その孫、藤原信実が編纂したとされる説話集が「今物語」である。「今鏡」畠山本の奥書の「今所書写之本者前右京権大夫信実朝臣本也」に登場するのは、この信実である。「今鏡」を所持していたことが、「今物語」に何らかの影響を与えたことも想像しうる。[注19]

陽明文庫十行本を底本とした講談社学術文庫『今物語』[注20]において、「左馬権頭の連歌」と題された説話に次の一節がある。

後白河院の御時、日吉社に御幸ありて、一夜御泊ありて、次の日、御下向ありけるに、雨の降りければ、御車近うつかうまつりける上達部の中に、きのふ日よしと思ひしものをといふ連歌の出で来たりけるを、おほかた付くる人なくて、ほど経ければ、左馬権頭なりける人の、はるかに先なりけるを召し返して、「これ付けよ」と仰せ事ありければ、ほどなく、けふはみな雨ふるさとへかへるかなと付けたりければ、「やすかりけることを、口惜しくも思ひよらざりける」と、人々言ひ合へりけり。

「これ付けよ」は、同書の現代語訳にあるように、「この句に付けよ」の意味、すなわち「に」の脱落と考える。連歌のあり方から、「を」の脱落とは考えられない。また、時代的に「これ」が感動詞である可能性もない。対称代名詞の可能性はないとは言えないが、前句を指して「これ」と言ったととる方が、文脈上、自然なように思う。

諸本の異同を見てみよう。諸本については、同書巻末の「『今物語』と藤原信実について」で、版本以前の形態をとどめると思われる一四の写本を一類本（A・B）、二類本（A・B）に分類した上で、版本およびその写しを別に立て

ている。

陽明文庫本は一類本Aに属するが、一類本Bに属する松平文庫本[注21]、二類本Aに属する内閣文庫本[注22]においても「これつけよ」である。群書類従版[注23]でも「是付よ」である。

以上、三本を見る限りでは、この箇所に語句の異同はない。

会話文の用例であることは、「今鏡」「今物語」に共通している。「今物語」のこの用例を「に」の脱落と見てよいのであれば、「今鏡」の場合も「に」の脱落の可能性があると言ってよいであろう。

浅見　徹が「『に』は格助詞として表現されるべき文から脱落することは稀にしかない。[注24]」と述べていることは参考になる。

六　謙譲語Bの「参る」

「今贄殿参り侍なむ」の「贄殿」を調理人とした場合、「参る」は謙譲語A[注25]の参上する意味なので、問題はないが、「贄殿」を場所とし、「に」が脱落していると見た場合には、『今鏡全釈』の口語訳「今贄殿へ参りましょう」のように、謙譲語Bの参る意味になり、時代的に問題となる。

1　辞典類

『日本国語大辞典』（第二版）は、最も古いと思われる用例から掲げる方針である。それによると、謙譲語Bの「参る」は「徒然草」において初めて現れる。

『日本国語大辞典』第二版「まいる」の項

㈡㈠①主として、自己側の者、また、敬う必要のない一般的なものの「行く」「来る」を、聞き手に対し、へりくだる気持をこめて丁重にいう。言い方を改まりかしこまったものにする。＊徒然草（1331頃）一一五「ここにて対面し奉らば、道場をけがし侍るべし。前の河原へ参り合はん」（略）

①は「自己側の者」だけでなく、「敬う必要のない一般的なもの」にも適用されるので、謙譲語Bと（謙譲語Bの丁重語用法）[注26]に該当する。

『古語大辞典』『角川古語大辞典』の「まゐる」の項でも、謙譲語Bの用例として、「徒然草」より古い文献のものは挙げていない。

「今鏡」の成立は一一七〇年頃[注27]であるから、「今贄殿参り侍なむ」の「参る」が謙譲語Bであるなら、これまで認定されているものより一六〇年早いことになる。そこまで遡ってよいのか不安がある。

2　「今物語」の「参る」

そこで、『今鏡本文及び総索引』、講談社学術文庫『今物語』を用いて、「今鏡」「今物語」の「参る」の全用例を調査してみた。すると、「今物語」に、謙譲語Bの「参る」が一例あった。「鳩吹く秋」と題されている説話である。

「（略）しばしとまり給へと言ひけるにこそ。無下に色なく、いかにのり給ひけるぞ」と言ひければ、「いでいで、さては色直してまゐらん」とて、ありつるつぼねの下口に行きて、

随身どうしの言葉のやりとりである。「さては色直してまゐらん」は、「それでは、私は彼女の顔色を和らげて参りま

しょう」という意味であるから、この「参る」は謙譲語Bである。

前節で取り上げた『日本国語大辞典』第二版「まいる」の項では、「徒然草」の用例の三例あとに、人情本「春色恵の花」の用例、

お台所へまいって、お膳の道具をたづねて参りませう

を挙げているが、この「たづねて参りませう」の「参る」が、ある動作をして戻る意味を表す補助動詞であるから、同種の用例である。

「さては色直してまゐらん」の諸本の異同を見ると、松平文庫本では「さては色なをしてまいらむ」、内閣文庫本では「さては色なをしてまいらせん」、群書類従版では「さては色直して参らん」である。内閣文庫本で「参らん」ではなく、「参らせん」となっている。「今物語」の現存写本がすべて近世のものであること[注28]とともに、用例の確実性に疑問を投げかける事実である。

「今物語」に見られる謙譲語Bの「参る」は、諸本の異同があり、確例とは言えない。しかしこのような用例があることで、「今鏡」の「今贄殿参り侍なむ」の「参る」が謙譲語B、「贄殿参る事あるまじ」の「参る」が謙譲語Bの尊大表現への転用である可能性は、残ったと考える。

七　おわりに

以上述べてきたことを整理すると、ア・イのようになる。

ア　「贄殿」を調理人と見た場合

訳「ただ今、調理人が参上するでしょう。」と申し上げたところ、「人にも知られずにおいでになったのだから、調理人は参上しないほうがよい。（略）」

「贄殿」を調理人とした用例がほかにない可能性があるが、「釜殿」の例から、場所を表す「贄殿」を、そこで働く人を表す語として用いることは、ありうると考える。

イ　「贄殿」を調理場と見た場合

訳「ただ今、私が調理場に参りましょう。」と申し上げたところ、「人にも知られずにおいでになったのだから、調理場に参らないほうがよい。（略）」

「に」が脱落していることになるが、「に」の脱落と思われる例が「今物語」にある。また、謙譲語Bの「参る」を用いていることになるが、謙譲語Bの「参る」も、確例ではないが、「今物語」にある。これらのことから、「贄殿」を場所として用いていることも、ありうると考える。

大殿のお供、播磨守師信から「とくしかるべきあるじなどつかうまつれ」と催促されている修理大夫俊綱が、イのように調理場に行くことを止められるのは不自然という考え方があるかもしれないが、家の主、俊綱が直接調理場に顔を出しては大げさになるということで止められたと考えることは出来ると思う。

右に見たように、ア・イともに可能性があるが、イの方が問題が大きいように思う。イにおいて認める謙譲語Bの「参る」は、一般に考えられているよりかなり早い用例になるからである。ただ、謙譲語Bの「申す」が「後撰集」「源

氏物語」に既に見られるのであるから、あっても不思議ではないと思う。その意味で、中古・中世の「参る」の用例については十分注意する必要がある。[注29]

注

(1) 榊原邦彦・他編『今鏡本文及び総索引』(笠間書院　一九八四年)
(2) 海野泰男著『今鏡全釈(上・下)』(福武書店　一九八二・一九八三年)(パルトス社より上・下合本復刻版発行　一九九六年)
(3) 大曽根章介・他編『日本古典文学大事典』(明治書院　一九九八年)
(4) 日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』第一巻(岩波書店　一九八三年)の「今鏡」の項(加納重文執筆)も、畠山本・尊経閣文庫本・蓬左文庫本(流布版本など)がそれぞれ別系統であることを述べている。西沢正史・他編『日本古典文学研究史大事典』(勉誠社　一九九七年)の「今鏡」の項(福田景道執筆)も、畠山本・前田本・流布本系諸本の三大別を述べている。
(5) 日本古典文学影印叢刊『今鏡』(財団法人日本古典文学会　一九八六年)
(6) 尊経閣叢刊『今鏡』(侯爵前田家育徳財団　一九三九年)
(7) 「慶安三年孟春仲旬　中野道伴刊行」の奥書のある国立国会図書館所蔵本。
(8) 関根正直著『今鏡新註』(六合館　一九二七年)
(9) 板橋倫行校註『今鏡』(朝日新聞社　一九五〇年)
(10) 竹鼻　績全訳注『今鏡(中)』(講談社　一九八四年)
(11) 中田祝夫・他編『古語大辞典』(小学館　一九八三年)
(12) 中村幸彦・他編『角川古語大辞典』第四巻(角川書店　一九九四年)
(13) 日本国語大辞典第二版編集委員会・他編『日本国語大辞典』第二版　第一〇巻(小学館　二〇〇一年)
(14) 『今鏡本文及び総索引』によると、「今鏡」の「にへどの」は、この二例のみである。
(15) 塚原鉄雄・他編『狭衣物語語彙索引』(笠間書院　一九七五年)
高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引　自立語索引篇』(武蔵野書院　一九八五年)

馬淵和夫監修『今昔物語集自立語索引』（笠間書院　一九八二年）
同監修『今昔物語集文節索引　巻二八』（同　一九七七年）
鎌田広夫・他編『讃岐典侍日記本文と索引』（おうふう　一九九八年）
山内洋一郎編『古本説話集総索引』（風間書房　一九六九年）
榊原邦彦編『水鏡本文及び総索引』（笠間書院　一九九〇年）
坂詰力治・他編『保元物語総索引』（武蔵野書院　一九八一年）
同・他編『平治物語総索引』（同　一九七九年）
菅根順之編『松浦宮物語総索引』（笠間書院　一九七四年）
鈴木弘道編『とりかへばや物語総索引』（同　一九七七年）
境田四郎監修『宇治拾遺物語総索引』（清文堂出版　一九七五年）
北原保雄・他編『延慶本平家物語　索引篇下』（勉誠社　一九九六年）
峰岸　明監修『古今著聞集総索引』（笠間書院　二〇〇二年）
深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引』（勉誠社　一九八〇年）
小久保崇明・他編『彰考館本『中務内侍日記』総索引』（新典社　一九八八年）

(16) 菊地康人は『敬語』（角川書店　一九九四年）三一三頁において、いわゆる謙譲語の中を

謙譲語A　〔私が先生をお招きする〕
謙譲語AB　〔私が先生をお招きいたします（「ます」は丁寧語）〕
謙譲語B　〔私がいたします・父がまいります（〃）〕
（謙譲語Bの丁重語用法）　〔電車が通過いたします・車がまいります（〃）〕

に分けている。

(17) （注1）に同じ。

(18) 加納重文「今鏡研究史」・海野泰男「今鏡研究の動向」（『歴史物語講座　第四巻　今鏡』風間書房　一九九七年）

(19) 山内益次郎『今鏡の研究』（桜楓社　一九八〇年）において、「今鏡」巻十「しきしまのうちぎゝ」の周防内侍転居の歌の詞書相当部分につき、「今物語の文は『冷泉堀川の西と北とのすみ』等のように、今鏡の文を念頭に置いていたと思われる箇所があり、」（二四八頁）と指摘していることも思い合わせられる。

(20) 三木紀人全訳注『今物語』（講談社　一九九八年）

(21) 松平黎明会編『松平文庫影印叢書　第七巻　中世説話集編』（新典社　一九九三年）
(22) 田嶋一夫・他「〈翻刻〉内閣文庫蔵『今物語』」（『いわき明星　文学・語学』第五号　一九九六年九月）
(23) 続群書類従完成会『群書類従』第二七輯（訂正三版　一九六〇年）
(24) 「助詞『が・の・に・を』の歴史」（『講座日本語と日本語教育　第一〇巻　日本語の歴史』明治書院　一九九一年）
(25) （注16）に同じ。
(26) （注16）に同じ。
(27) 『日本古典文学大辞典』『日本古典文学研究史大事典』『日本古典文学大事典』の「今鏡」の項による。
(28) （注20）同書三五二頁。
(29) 『日本国語大辞典』第二版「もうす」の項
㊀⑥主として、かしこまり改まった気持での対話や消息（勅撰集などの詞書を含む）に用い、「言う」をへりくだり、あるいは丁重に表現する。申します。＊後撰（951-953頃）雑二・一一五七・詞書「これかれ女のもとにまかりて物いひなどしけるに、女の、あなさむの風やと申しければ」＊源氏（1001-14頃）夕顔「かの白く咲けるをなむ夕顔と申侍」（略）
「源氏物語」の用例は、（謙譲語Bの丁重語用法）である。

（かわぎし・けいこ　商学部教授）